第2巻 黄金時代

ワンシャオポー
王小波
Wang Xiaobo

下放青年と女医の特異な愛の顛末

『黄金時代』は、雲南の農村に下放した青年と女医の「ふしだら」な関係の顛末を描く。逃走した二人は山中に隠れて暮らすが、やがて農場に戻り、監禁されて始末書を書かされた。しかし二〇年後、北京で再会した二人は往事を回想し、あのころが「黄金時代」だったと語り合う。台湾『聯合報』文学賞中篇小説大賞（一九九三）の受賞作。

【著者紹介】一九五二年、北京生まれ。一九六八年に農村へ下放。文革後は編集者、教員を経て、一九八四年に渡米し比較文学を学ぶ。帰国後、本格的に創作活動を展開。その作品は当初、台湾をはじめ海外の華人社会で高く評価された。一九九七年に心臓病のため四五歳の若さで急逝したあと、中国本土でも「王小波現象」と呼ばれる大ブームが起こった。

【収録作品】「黄金時代」「三十而立」「流れゆく時の中で」「白銀時代」

【訳者】桜庭ゆみ子（慶應義塾大学准教授）

Take Free !

勉誠出版 Tel03-5215-9021 Fax03-5215-9025
WEBSITE. http://bensei.jp

「コレクション中国同時代小説」第一期（第1巻～第5巻）
2012年4月下旬刊行！
※第二期（第6巻～第10巻）は6月刊行予定

第2巻　王小波『黄金時代』より　（訳：桜庭ゆみ子）

※実際の書籍とはレイアウトが異なります。

黄金時代

一

俺は二十歳の時に雲南（ユンナン）に下放〈ここでは、一九六八年より行われた毛沢東主導による都市部の若者を農村や山間地域に送って肉体労働させる思想教育政策のこと〉した。陳清揚（チェンチンヤン）は当時二十六歳、俺が下放した地域で医者をやっていた。俺が山すその十四隊、あいつが山上の十五隊だった。ある日山から下りてきたあいつは自分はふしだらではないと議論をふっかけてきた。当時はまだ彼女のことはよく知らなかった。ほんの少しだけ聞いていたというべきか。彼女が議論しようとしたのはこういうことだ。皆からふしだらだと言われるが、自分はそうではないと思っている。なぜなら、ふしだらな女は男を寝取るけれど自分は寝取ったことはない。夫はすでに一年以上も獄に入っているが、その間男を寝取っていないし、それ以前も寝取ったことはない。だから、なぜふしだらと言われるのか全くもってわからない。俺があいつを慰めるのは簡単だった。ふしだらでないと論理的に証明してやればいい。もし陳清揚がふしだら、つまり男を寝取ったならば、少なくとも一人は寝取られた男がいなくてはならない。今もってそういった男を確定することができないのだから、陳清揚が男を寝取るというのは成立しないのだと。でも俺はわざと陳清揚がふしだらだ、それも疑いようがない、と言ってやった。

そもそも陳清揚が、自分はふしだらではないと証明してもらいに訪ねてきたのは、俺が注射をしてもらいに彼女を

sample

訪ねたことが始まりだ。事のあらましはこうだ。農繁期に隊長は俺を鋤おこしではなく田植えに回した。それで俺は腰を伸ばしていられなくなった。知り合いは皆知っていたが、俺は腰に古傷があり、おまけに上背も百九十センチを超えている。一ヶ月ほど田植えをしていたらもう腰痛に耐えられなくなり、痛み止めを打たなければ眠れなくなった。医療隊の医務室の治療針は先端のメッキがはげている上、どれも折れ曲がっていてしょっちゅう腰の肉を引っかけた。そのうち腰がまるで散弾銃を食らったみたいになって傷が癒える間がなくなってしまった。この時十五隊所属医の陳清揚が北京医科大出身だったことを思いだし、少なくとも針のとがった先端とかぎ針の区別くらいはつくだろうと見てもらうことにしたのだ。こうして診察を受けた後、三十分もしないうちにむこうが俺のところまでやってきて、自分がふしだらではないことを証明してくれと言ったわけだ。

ふしだら女を見下しているわけじゃない、と陳清揚は言った。彼女の観察によると、ふしだらな女は皆善良で積極的に人助けをするし、そのうえ相手ががっかりしないように最大の努力をする。敬意の念さえ覚えるほどに。問題はふしだらがいいか悪いかではなく、彼女がそもそもそういった女ではないということだ。猫が犬ではないのと同じように。ある猫がもし犬と呼ばれたら、猫は落ち着かない気分になるだろう。今彼女は皆から何かにつけふしだらと呼ばれて気もそぞろになり、一体自分が誰なのかもわからなくなってしまっている。

陳清揚が俺の草葺き小屋にやってきたときは、素足で腕もあらわにして白衣を身に着けていた。山上の医務室での格好そのままだ。違っていたのはばらしていた髪をハンカチで縛ってまとめたことと、突っかけのサンダルを履いていたこと。その様子を目にした途端、俺は、白衣の下に何か着ているのかな、それとも着ていないのかな、と考え始めていた。これは彼女がとても美しいことを証明するものだ。着るものに無頓着でいられるのだから。小さい頃から培われた自信だ。おまえは確かにふしだらだよ、俺はこう言って根拠をあげた。まずふしだらとは一つの言い方に過ぎず、皆がふしだらだ、といえばそれはふしだらなのだ。理由などない。男を寝取ったというならばそうなのであり、これも理由などない。ではなぜ皆からふしだらだと言われるのかと言えば、思うに、皆の見解では、結婚した女

sample

は男を寝取らず、顔の色も黒くて、乳房は垂れ下がっているものだ。だがあんたの顔は黒くなくて白い、乳房も垂れ下がらずぴんと張っている、だからふしだらなんだ。もしふしだらになりたくないなら、顔を黒くし、乳房を垂れ下がらせればいい、そうすれば今後ふしだらだと言われなくなる。こんなの割に合わないだろう？　割を食いたかったら男を寝取るんだ。そうすれば、自分でもふしだらだと認められるから。皆には、あんたが男を寝取ったか見届けてからふしだらと呼ぶかどうか決める義務はない。でもあんたの方には、皆からふしだらと呼ばれないようにする義務がある。陳清揚はこれを聞いて顔を真っ赤にし、大きく見張った目に怒りをたぎらせ俺にパンチを食らわせるところだった。この女の平手打ちは有名だった。多くの者がやられている。けれども彼女はふと気抜けたように、いいわ、ふしだらならふしだらで、でも垂れ乳とか色黒とかはあんたの知ったこっちゃない、と言った。そして続けた。こんなことばかり考えてるんだったら、平手打ちを食うことになるからね。

二十年前の、陳清揚とふしだらとは何かについて議論した情景を思い返してみる。当時俺は顔が土気色で、乾いてひび割れた唇には巻紙や刻みたばこのかすがつき、枯れかかったシュロのような髪の毛をして、すり切れた解放軍服の上着の、あちこちに開いた穴に絆創膏を貼ってつぎあてにしていた。足を組んでベッドに腰掛けた様は、まるでチンピラだ。こんな奴に乳房が垂れ下がっただ何のといわれた陳清揚が、どれだけ腕をむずむずさせていたかわかるだろう？　あいつは少々神経質になっていたが、それは、診察してもらいに来る大勢の精悍な男どもが、どいつも病気でないからだ。奴らは医者に診てもらいに来たのではなく、ふしだらな女を見に来たのだ。俺だけが例外だった。俺の腰はまるで猪八戒に熊手でグサグサ刺されたみたいになっていた。実際に痛むか否かにかかわらず、この穴だけでも医者にかかるまっとうな理由といえた。それで、俺にならふしだらではないことを証明してもらえるかもしれないと希望を抱いたのだ。ふしだらではないと一人に認められることは、誰からも認めてもらえないのとは大いに違う。だが俺はわざとあいつを失望させてやった。

sample

ふしだらではないと証明する気になればそれができるなんてそんな簡単には事は運ばないさ、と俺は思ったのだ。本当は、ああいった証明する必要のないもの以外は、証明なんてできるはずがなかった。春に、隊長が、俺が隊長の家のメス犬の左目を銃で撃ってだめにしたから犬がいつもバレエを踊ってるみたいに頭をかしげて人を見るんだと言い、これ以後隊長は俺に意地悪く当たるようになった。清廉潔白であることを証明するためには次の三つの道しかないと思った。

1、隊長の家にはメス犬は存在しない。
2、そのメス犬は生まれつき左目がない。
3、俺に手がなく、銃を持って撃つことができない。

結果としてどれ一つとして成立しない。隊長の家には確かに褐色のメス犬がいたし、そいつの左目は確かに撃たれてだめになったものだ。俺は銃を撃てるのみならず、かなりの腕前だった。この事件のちょっと前に、羅小四（ルオシャオスー）の空気銃をかり、緑豆をひと皿ほど銃弾がわりにしてガランとした穀物倉庫の中でネズミを一キロほど仕留めてもいた。もちろん、俺の隊には銃の腕前がいい者はほかにも大勢いる。羅小四だってそうだ。空気銃は奴のものだし、奴が隊長のメス犬の目を撃ってだめにしたときは俺も横で見ていた。だが他人を告発するのは俺の趣味じゃない。羅小四には親切にされてもいる。だいたい隊長は羅小四の怒りを買うのを恐れて俺がやったと決めつけたのだ。こういうわけで俺は黙っていた。黙っていれば黙認したことになる。こういう訳で春から俺は田植えにまわされ、半分に折れた電信柱みたいに田んぼに身体を突っ込む破目になり、秋の収穫が済んでからも牛の放牧で暖かい飯にありつけないことになったのだ。もちろん俺だって黙って指をくわえていたわけではない。ある日山でちょうど羅小四の空気銃を手に

Sample

していたとき、隊長の家のメス犬が山にやってきたのが目にとまったので、弾丸を一つ右目にお見舞いしてやった。この犬は左目がなかったところに右目もなくしたんで、隊長のところに戻って姿を見てもらうわけにもいかず—どこに行っちまったかは神のみぞ知るだ。

当時は山に登って牛の番をするか家で寝ているかで他には何もすることがなかった気がする。何もかもが自分とは無関係に思えた。ところが、陳清揚がまた山をおりて俺のところにやってきたのだ。実は、俺と関係ができたというまた別の噂が広まっていた。それで、二人は清廉潔白だということを俺に証明させようとしたのだ。俺は答えた。もし俺たちが潔白だと証明したいのなら、まず、陳清揚が処女であること、次に、俺がインポテンツで性交能力がないこと、この二点を証明しなければならない。この二つはどちらも証明しがたい。だから二人が潔白だと証明することはできない。俺としては、黒ではないとは言えない方に傾いているようだ、と。陳清揚は俺のいうことを聞くなり、怒りで顔が真っ青になり、続いて真っ赤に変わり、一言も言わずに立ち上がって出て行った。

あんたは徹頭徹尾チンピラだったと陳清揚は言った。自分が潔白だと証明してもらおうとした第一回目は、白い目をむいてでたらめを並べ立て、二回目に二人が潔白だと証明して欲しいと言ったときも、まじめくさった顔でセックスをすることを提案してきたのだ。だから、いずれは平手打ちを食らわしてやらねばと早くから考えていたのだという。彼女がこんなことを考えているとわかったならばその後のことは起こらなかったかもしれない。

二

二十一歳の誕生日、俺は川辺で牛の番をしていた。その日の午後、草地に寝転がっていたらそのまま寝込んでし

sample

まった。眠り込む前は数枚の芭蕉の葉を身体にかけていたのだが、目が覚めてみると、葉っぱはあとかたもなく消えていた（恐らく牛が食べてしまったのだろう）。乾期の亜熱帯の太陽にさらされた身体が真っ赤に日焼けして、耐え難い痛痒さだった。チンポコが、空前の長さで、天に向かってまっすぐに突っ立っている。誕生日の光景がこれだ。

目が覚めると、太陽はぎらぎらとまぶしく、空はぎょっとするほど青く、身体にうっすら積もった細かい砂埃がまるでベビーパウダーをはたいたようだった。一生の間に無数に勃起したが、このときほど威勢よく、力がみなぎっていたことはなかった。たぶん僻地で、あたりに誰も居なかったからだろう。

牛を見ようと起き上ると、奴らがはるかかなた、河が二またに分かれたところにうずくまって静かに草を食んでいるのが見えた。この時分、あたりは静まりかえり、田野では白い風が吹いていた。川岸では柵で囲われた牛が数頭、目を真っ赤にして泡を吹きながらけんかをしている。この牛どもは陰嚢が収縮し、陰茎が突っ立っている。こっちの牛はそんな風にはならない。けんかをふっかけられたとしても、相変わらずうずくまって動こうとしない。けんかをして傷を負い春の農作業に影響が出ることがないように去勢してあるのだ。

去勢する時、俺はいつもその場にいた。雄牛は普通、ナイフで切除すればよかった。けれども特に性質の荒い奴には金槌での去勢が必要だった。つまり陰嚢を切開して睾丸を取り出し槌でたたきつぶすのである。この去勢を受けた牛は、他のことには一切無関心で、ただ草を食べて働くことしかしなくなる。処分するときに縛る必要すらなくなる。槌を持った隊長はこの手術が人類にも同じような効果をもたらすと信じて疑わず、いつも俺たちに向かって、お前ら、ろくでなしの若造め、金槌でぶったたかないと大人しくなんねえのか！　と怒鳴った。隊長の論理に従えば、俺の身体のこの真っ赤っかで、まっすぐ突っ立った、一尺もの長さのこいつこそ悪の化身ということになる。

もちろん、俺は俺で違った意見を持っている。言わせてもらえば、こいつは、何よりも重要で俺の存在そのものといっていいほどだ。空は夕暮れ時に向かい、空にはのんびりと雲が漂っている。下半身は暗がりの中に沈み、上半身は日の光の中を漂う。この日俺は二十一歳、一生の中の黄金時代にあった。俺にはたくさんの願望があった。愛した

sample

かったし、食べたかったし、また半分明るく半分暗い空の雲に一瞬のうちに変わってしまいたいとすら思っていた。生きるということは、じわじわと槌で叩かれる過程であり、人間は日一日と老い、大きな望みも日一日と消えていき、しまいには睾丸に金槌を食らった牛と同様になっちまうのだと知ったのは、後のことだ。ただ、二十一歳の誕生日を迎えたときは、先の見通しがまだ甘かった。永遠に威勢よくて、何ものにもたたきつぶされるはずがないと思っていたのだ。

その日の晩は、陳清揚に魚を振る舞うことになっていた。だから午後には魚を手に入れなくてはならなかった。五時過ぎようやく俺は魚を囲い込んだ場所に行くことを思い出した。その小川の枝分かれした場所に着く前に、ジンポー族の二人の子供が泥をあたりにはねちらかしながら取っ組みあって飛び出てくると、俺にまで泥を飛ばし、耳たぶを俺に捕まれるまでけんかをやめなかった。俺は声を荒げて怒鳴った。

「この間抜けやろう、魚はどこだ」

やや年かさの方が答えた。「ちくしょう、勒農（ラーノン）が悪いんだ。堤の上にいつも尻乗っけて、このあほな堤を壊しちまった」

勒農が喉を張りあげ、「王二（ワンアル）、堤がしっかりしてねえんだよ」とどなったので、俺は、

「あほ抜かすな、草を刈って混ぜて作ったんだ、なにが堤がだめなもんか」と答えた。

中に入ってみると、勒農が座ったためか、俺の作り方が悪かったためか、堤が倒れ、貯めた水も流れて魚は影も形もなかった。一日の労働が無駄になってしまったのだ。もちろん俺は自分が間違っていたと認めるはずがない。勒農をおもいっきり罵った。勒都（ラードゥ）（つまりもう一人の少年）も俺に口調をあわせた。勒農は猛り狂い、大きく飛び上がってどなった。

「王二、勒都のあほったれ、お前ら、よってたかって俺をこけにしやがって。親父に言ってでっかい銃で撃ち殺し

sample

てやる！」

怒鳴り終わると、この馬鹿は岸に向かって駆け出し、一足飛びに逃げだそうとした。俺はぐいっと奴の足首をつかみ、引きずりおろした。

「お前は逃げちまって俺たちが牛を見るのかよ、そうは問屋がおろさねえよ」

このガキはわあわあ叫びながらかみつこうとしたが、俺に、万歳の格好で地面に押しつけられた。奴が口に泡を飛ばしながら、漢語、ジンポー語、タイ語をちゃんぽんに使って罵るのをうけて、俺は北京弁でやり返した。と、いきなり奴は罵るのをやめ、うらやましそうな顔で俺の下半身を見つめた。顎を引いて下を見ると、俺のチンポコがまた突っ立っていた。「すげえ、勒都家の姉ちゃんとやるつもりだ」と勒農がしきりに賛美する。

俺は奴を放り投げるとズボンをはきに戻った。

夜、俺がポンプ室でガスランプを灯している時などはよく、陳清揚がふらりと訪れ、何のために生きているのかわからない、と話しだし、自分はすべてのことに全く無実なのだと語りはじめるのだ。俺は、自分が無辜だなんて思うことこそ最大の罪悪だと答えてやった。俺からすると、人間は基本的にうまいもの食いで怠け者で、好色淫乱なのだ。もし働き者でつつましやかで、身を清く保つというのならそれこそ虚栄の罪を犯している。彼女はこの言い分については、興味深げに聞いていたが、決して同調することはなかった。

その晩は俺が川岸でランプを灯しても、陳清楊はなかなかやって来ず、九時過ぎになってようやく戸口の前まできて「王二、このろくでなし、出てこい」と怒鳴った。

俺が外に出てみると、彼女は白一色の服装で、とても清楚な装いだったが、表情はこわばっていた。彼女は言った。魚を肴に大いに語り合おうって言ったくせに、魚はどこなのさ。まだ川の中なんだ、と答えるしかない。わかったわ、じゃあ、あとは大いに語り合うことね、この場で話しましょう、と言う。中に入って話そうと誘うと、それで

Sample

もいい、と部屋に入ってきて座った。どうもかんかんになっているようだった。

二十一歳の誕生日を迎えたあの日、俺は陳清揚をナンパするつもりだった。彼女は俺の友達だし、胸が大きく腰が細く、尻が丸かった。それだけじゃなく、首はほっそりと長く、顔もきれいだった。俺は彼女とセックスをしようと思い、しかも相手が断るべきではないと思っていた。もしあいつが俺の身体を使って人体解剖の練習をしようというなら喜んでそうさせる、だから俺があいつの身体を借りてどこが悪い？　唯一の問題はあいつが女だということだ。女というものはどうも度量が小さい。だから俺はあいつを啓発しなくちゃならない。それで俺は「義理人情とは何か」ということを説明しだした。

俺の考えでは、義理人情とは義侠心に富む男同士の偉大な友情だ。水滸伝の中の豪傑たちは、殺人に放火何でもござれだがひとたび、名高い宋江の名が出れば途端にひれ伏し拝む。俺もああいった名も無き英雄のように、何も信じないが、義理人情にだけはどうあっても背かない。あらんかぎりの悪事をつくし、天から見放された奴でも、友ならばそいつの肩を持つ。その晩、俺はこの偉大な友情を陳清揚に捧げ祭ったところ、陳清揚は大いに感激し、この友情を受け入れることを即表明した。そればかりか、より偉大な友情で応えるわ、たとえあんたがちっぽけな人物であっても裏切らない、とまで言った。こう言われて俺は気を許し、二十一になったのにまだ男女の秘め事を体験してない、このままでは気が済まない、と本音を切り出した。あいつはぽかんとした。心理的準備ができていなかったのだ。しばらくしゃべっても何の反応もない。俺の手を肩に置くと、筋肉がぶるぶるふるえていた。いつ平手打ちが飛んできてもおかしくなかった。もしそうなったら、女というものが友情を理解しないことの証明ができる。でもあいつはそうしなかった。突然、フンと言うと笑い出し、そして言った。本当に馬鹿だった、こんな簡単にあんたのペースにはまるなんて。

何のペースだって、なんて言った？　俺は尋ねた。

何も言ってない。彼女が言った。

さっき俺が言ったことに同意するかい、と尋ねると、ヘンッ、と言うなり顔を真っ赤にした。どうもばつが悪そうだ

sample

と見て取って俺は積極的な攻めに入った。あいつは俺を数回押し返したが、そのあとで言った。ここじゃなくて山の上に行きましょう。それで俺はあいつと一緒に山に登った。

陳清揚が後に言ったが、俺の偉大な友情が本当なのか、それともその場で適当に編み出したものなのか最後までわからなかったという。ただ、こうも言った。俺のああいった言葉に魔法にかかったみたいに魅入られ、すべてを失ってもいいと思ったのだ、と。偉大な友情は真実でもなく偽りでもない。世のすべてのものと同じように、信ずれば真実になり、それが続いていく。偽じゃないかと疑ったらそれは偽になる。俺の言ったことも半分は信で半分は偽だ。俺はいつでも天が崩れても退却せずに、自分の言ったことを現実のものとする用意があるけれど、こんな態度だから、だれも俺のことを信用しないのだ。俺は友を作ることを何よりも大事な事業と見なしている。友とは陳清揚ら二、三人にすぎないが。その晩俺たちは山に登ったが、途中半分ほど行ったところで陳清揚がいったん家に戻りたいので、裏山で待っていてくれと言った。反故にされるんじゃないかとも思ったが口には出さず、直接裏山に行き山の上でたばこを吸って待っていた。しばらくすると彼女はやってきた。

俺が初めて注射してもらいにやって来たとき、ちょうど机に向かって居眠りをしていたところだったのよ、と陳清揚は言った。雲南では誰もが大部分の時間、居眠りをしていた。だからいつも半眠り状態なのだ。俺が部屋に入っていったとき、部屋の中が一瞬暗くなった。わらぶき屋根の土壁造りの家では、出入り口を明かりとりにしている。彼女はその時ちょうど目を覚ました。そして顔を上げて何か用かと尋ねた。腰が痛いのだというと、ちょっと見たいから横になってくれという。それで、竹のベッドにバタンとうつぶせに倒れ込んだので、ベッドがばらばらにくずれそうになった。腰の痛みがとてつもなくひどかったので、俺は全くかがむことすらできなかったのだ。そうじゃなければ診てもらいに来るはずがない。

俺は若いときは口元に向けて縦皺が走り、目の下には隈ができ、背が高く、服はぼろぼろで、そのうえ寡黙だっ

sample

た、と陳清揚は言った。注射をしてやるとすぐ帰ってしまい、ありがとうのひとことすら言ったかどうか。ふしだらではないと証明してもらえるかもしれないと思いついたときには、三十秒は経っていた。後を追って外に出ると十四隊に戻る近道をいくのが見えた。土手を下り、溝があれば飛び越え、くぼみがあればジャンプし、山の傾斜に沿って恐ろしい早さで駆け下りていく。ちょうど乾期の朝で風は山の麓から吹いており、大声で呼んでも声が届かない。しかも一度も振り返らない。こうして立ち去ってしまったのだ。

当時追いかけていこうとも思ったが、追いつけないだろうと考えた、とも言った。それにふしだらではないと証明してもらえるかどうかもわからない。それで医務室に戻った。後に俺を訪ねようと思い直したのは、皆が自分をふしだら呼ばわりし、敵にまわったが、俺は敵ではないだろうと思ったからだった。機会を逸し俺までも敵に回したくなかったのだ。

その晩、俺は裏山でたばこを吸っていた。夜だったが遠く先まで見えた。月が明るく輝き、山の空気も澄んでいた。遠くで犬が吠えているのも聞こえた。陳清揚が十五隊を出る姿がすぐ目にとまった。昼間だったらこんなに遠くから見ることはできないだろう。それでもやはり昼間とは違った。あたりに人気がなかったからかも知れない。

夜中に人が居るかどうか俺だってはっきりしたことは言えない。あたり一帯は銀灰色だ。もし松明を持って道を行くものがあれば、それは全世界の人間に自分の存在を知らせたいからだ。もし松明を持たないなら、隠れ蓑を羽織っているようなもので、そこにいるとわかっているものには見えるが、それを知らないものには見えない。陳清揚がゆっくりと近づいてくるのを見て俺の心臓は早鐘のように鳴った。誰にも教わらなくとも、あのことをする前に少々愛撫が必要だということはわかっている。

対する陳清揚はひどく冷淡だった。唇は冷たく、愛撫にもなんの反応もない。不器用に服のボタンを外そうとしたとき、俺の手を払いのけ自分で一枚ずつ脱ぐときちんとたたんで横に置き、身体をまっすぐ伸ばして草の上に横に

sample

なった。

陳清揚の裸体はすばらしかった。慌てて服を脱いで覆い被さると、また払いのけられ、そして手渡された。

「使い方知ってるの？　教えてほしい？」

コンドームだった。ちょうど興奮しているまっ最中だったので、これには少々むっときた。それをはめるともう一度彼女に覆い被さる。むやみに動かしても気が動転してうまくいかない。突然あいつが冷たい声で言った。

「ねえ、あんた自分が何やってるかわかってんの？」

もちろんわかってるさ、すまないけどもう少しこっちに寄ってくれないか。そうすれば明るさを利用しておまえの身体の構造をみきわめることができるから、と答えた。その途端、パシッと巨大な音が響き、まるで耳元で雷が鳴ったかのようだった。平手打ちだった。俺は飛び上がって服をひっつかみ逃げだそうとした。

三

その晩、俺はその場に残った。陳清揚につかまれ、偉大な友情という名目のもとに引き留められたのだ。ひっぱたいたことは悪かった、と彼女は言い、俺に対する態度もよくなかったと認めた。けれども、俺の「偉大な友情」は偽物だと言い、わたしの「身体の構造」をみきわめるためにだましたんでしょっ、とすら言った。俺がペテンにかけたというなら何で俺のことを信じたんだ、と俺は答えた。身体の構造をちょっと見たいと言ったのだって、相手の許可のもとに行ったことだ。嫌なら早く言ってくれればよかったのだ。手を出して打ってかかるなんて仁義にかける、と。するとあいつは大笑いし、そして言った。俺の身体のあの部分を見るべきじゃなかったんだわ。あれの、その間抜けた、恥知らずな様子を目にして、思わず怒りがわき上がってきたのよ。

こうやって口論していたときも、俺たちは一糸まとわず、俺のあの部分は依然としてぴんと突っ立ったままで、ゴ

sample

ムのカバーを身にまとった姿を月光にさらし、輝きを発していた。言われた言葉に俺が不機嫌になったのを相手も察した。それでなだめるように言った。とにかく、これが醜いことこの上ないと、認めるでしょ？

それは怒り狂ったコブラのように突っ立っており、確かに余り見栄えはよくなかった。見たくないというのなら、仕方がない、と俺は言い、ズボンをはこうとした。そんなことしないで、彼女は続けて言った。それで俺はたばこを吸い始めた。一本吸い終わったとき、あいつが俺に抱きついた。こうして、俺たちは草の上であのことを済ませたわけである。

俺は二十一歳の誕生日までは童貞で、誕生日の晩に、一緒に山に行こうと陳清揚を誘惑した。その晩頭上で月が輝き、月が隠れると、早朝あたり一面に降りる露のように空いっぱいに星が瞬いた。風はなく、山の上はしんと静まりかえっていた。俺はすでに陳清揚と愛を交わし、童貞ではなくなっていた。でも少しも楽しくなかった。俺があれをしているあいだ、むこうは一声も発することなく、腕枕をして、何かを考えるように俺を見ていた。結局俺は一人芝居を続けていた。それだって長く続けていたわけではなく、まもなく終わった。事が終わり、俺は怒ってもいたし落ち込んでもいた。

これが現実だなんて信じられない、と陳清揚はいった。こともあろうに俺が目の前で醜い男性生殖器を露出し、少しも恥ずかしがらず、また、そいつも恥ずかしがる素振りも見せないで、ぴんぴんしたまま両股の間に割って入るなんて。女性の身体にこの口が開いているから、男はそれを使いたいと思う、こんなことは実に非合理だ。以前は夫が、毎日同じことをした。その時はじっと黙って、いつか相手が恥ずかしいと感じ、こんなことをする理由を自分から釈明してくれるだろうと待っていた。けれども夫は何も言わず、そのまま監獄に入ってしまったのだ。彼女のこんな話は聞きたくもなかった。それで俺は、したくないんだったらなぜ応じたんだよ、と尋ねた。度量が狭いと思われたくなかったのよ、彼女が答えた。実際狭量な奴だよ、おまえは、俺は言った。すると、彼女は、もう止めましょう、このことでけんかはおしまいよ。そして、夜にまたここに来て、もう一度やってみましょう、もしかしたらいい

sample

と思うかも知れない、と言った。俺は何も答えなかった。朝の霧が立ちこめると、俺は彼女と別れて牛を放ちに山を下りた。

その晩俺は彼女のところに行かずに、病院に入ってしまった。ことの次第はこうだ。朝、俺が牛の囲いの入り口に行くと、仲間の何人かが俺を待てず、牛を引き出しに囲いの中に入っていた。田を耕すので、皆頑丈な牛を選んでいた。そこには、三悶児（サンモンアル）という若造がいたが、そいつが丁度大きな白い牛を引いて行くところだった。その牛は毒蛇にやられてるから使っちゃだめだ、と俺は近づきながら言ったが、聞こえないようだった。俺が牛の鼻から綱をもぎ取ると、殴りかかってきた。そこで胸をどんと突いたところドシンと尻餅をついた。途端に他の連中が一斉におしかけ、俺たちを取り囲むようにしてけんかの体勢に入った。北京の知青（ジーチン）〈「知識青年」の略。一九五〇年代から文革期にかけて農村部に労働に赴いた都市の若者たち。多くは初等から中等教育を受けたレベル〉と地元の知青が、棍棒やベルトで殴り合いを始めた。しばらくやり合ったあとで、殴り合いはやめにし、俺と三悶児をレスリングをさせて決着をつけようということになった。三悶児は俺を負かすことができず、拳骨を使ってきたので、俺は奴を牛の囲いの前の肥だめに蹴り入れてやった。全身牛の糞まみれである。三悶児は這い上がると、「三歯」〈三つの刀がある畜産用の耕耘機〉をさっと手に取り、斬りかかろうとしたところで、仲間に引き留められた。

これが朝の状況だ。晩に放牧から戻ってくると、生産隊長が、貧農下層中農を殴打するとはなんということだ〈文革中、学生が農村地域に行く名目は貧農下層中農に学ぶというものだった〉、お前の批判闘争大会を開くぞ、と言った。俺はこの機に俺を始末する気かい、俺を怒らせない方がいいぜ、と答え、総出のけんかにしたいのか、とたたみかけるように言った。お前を始末しようというんじゃないが、三悶児のお袋がギャアギャア騒ぐんで仕方がないんだ、隊長は答えた。そしてあいつのお袋は寡婦でえらく鼻息が荒い。それから、現地のしきたりがこうなんだ、と続けた後しばらくして、闘争大会ではなくて手助けの会に変更だ。前に出て自ら反省してくれ、それも嫌だというなら奴のお袋をお前のところに直接やるさ、と言ったのだ。

sample

会は大混乱だった。地元の者たちは口々に、知青はまるでなっとらん、鶏はぬすむわ犬は捕るわ、はてまた人を殴るとは、と言えば、知青の方は、でたらめこくな、だれが盗みをするか、証拠があるのか、俺たちは辺境地域の手助けに来たんだ、軍の補強にかり出された囚人でもない、お前たちに勝手に濡れ衣をきせられてたまるか、と答える。俺も前に出ても反省するどころか、罵ってばかりいた。油断していたら、三悶児のお袋が背後にそっとまわり、苗抜き作業に使う重い腰掛けをつかんで俺の腰めがけて一気に打ち下ろした。それが、古傷のど真ん中に命中し、俺は目の前が真っ暗になった。

気がつくと、羅小四が仲間の先頭に立ち、牛小屋に火を放ってやる、と息巻いている最中で、三悶児のお袋に命で償わせてやるとも叫んでいた。生産隊長が人を従えてこれを制止しようとし、副隊長が俺を担ぎあげて牛車に載せ病院に運ぼうとしていた。衛生員が、動かしちゃだめだ、腰骨が砕けている、動かしたらおしまいだ、と言う。腰骨は折れていない、早く病院に運んでくれ、と俺は言った。けれども俺の腰の骨が砕けていないかどうか誰も判断できず、俺を持ち上げてもおだぶつにはならない保証ができなかった。そんなわけで俺はずっと横たわったままだった。しばらくして隊長が声をかけたので、俺は早く電話を回して陳清揚を呼び、腰が砕けているかどうか見てもらってくれ、と言った。ほどなくして陳清揚が髪をふり乱し目を赤く泣きはらしてかけつけてきた。心配しないで、あんたが下半身不随になったら、わたしが一生面倒見るから、口を開くなりこう言ったのだ。彼女の診たては俺と同じだった。そこで俺は牛車に乗せられて農場本部の病院に向かったのである。

その晩陳清揚は、俺を病院に送り込んだ後、腰のレントゲン写真の結果、問題なしとわかるまでずっと付き添い、一両日中に見舞いに来ると言って帰って行った。しかしその後は一度も来なかった。俺は一週間病院にいて動けるよ

sample

うになると、彼女のもとに飛んでいった。

俺が陳清揚の診療所室に入っていったとき、山ほどの物を背負っていたので、背中のかごは大きく盛りあがっていた。鍋釜類のほか、ゆうに一ヶ月分はある二人の食料だった。彼女は俺を見ると、ちょっと微笑んで、よくなったの？

こんなにたくさん持ってどこに行く気なのよ、と尋ねた。

清平（チンピン）の温泉につかりに行くんだ、と俺は答えた。それはいいわね、温泉は古傷にも効くし、と彼女はものうげに椅子に背をもたせかけ天井を仰いで言った。本当は温泉ではなくて、裏山に登ってそこで数日過ごすんだ、と俺が言うと、彼女は、裏山には何もないわ、やっぱり温泉に行きなさい、と答えた。

清平の温泉とは、山の窪地に広がった泥沼のことで、周囲の土手には雑草が茂っている。病気持ちが土手の上に掘っ立て小屋を建て、そこに住み着いている。病気なら何でも揃っているから、傷を治すどころかハンセン病にかかっちまう恐れもある。裏の荒れた山の窪地には水無し川が走り、木がまばらに生える茂みでは香りのいい草が生い茂っていた。俺は人気の全くない場所に草葺（ぶ）きの小屋を建てるつもりだった。人影が絶えたその地には晩春の景色が広がり、そこに住めば人格の陶冶に励むことができるはずだ。

陳清揚は俺のいうことを聞いて、笑いだしながら、そこにどうやって行くか教えてくれる？　私も行くかもしれない、と尋ねた。そこで彼女に道を教え、地図まで書いてやってから一人山に向かった。

俺は荒れた山に入ったが、陳清揚は訪ねて来なかった。からっ風がいつ止むとも知れず吹き荒れ、草葺き小屋をゆさゆさと揺する。陳清揚は椅子に座って風の音を聞きながら、これまで自分の身に起きたことを思いだしていた。一切が本当に起きたことではないような気がしていた。自分がよくわからないままにこの荒れた地方にやってきて、そのうえ故なく皆からふしだらだと言われ、そして本当にふしだらなことをしてしまうとは。これはどうにも信じがたいことだった。

sample

陳清揚は言った。ときおり部屋から外に出て裏山を見上げ、山の中腹に曲がりくねって走るたくさんの小道が山奥へと通じているのを見たとき、俺の言った言葉が耳元に響くようだったと。あの道の一つに沿って山に入っていったならば俺に会える。これは疑いようのないことだった。けれども疑いようのないことほど疑うに値した。たぶんあの道はどこにも通じておらず、王二は山にいない。そもそも王二など存在しないのかもしれない。

数日後、羅小四が仲間数人を引き連れて病院に見舞いにやってきたが、病院では誰も王二のことなど知らず、もちろんどこに行ったか知る者もいなかった。当時病院では肝炎が流行っており、感染していない患者は皆家に戻って療養することになり、医者たちも次々と生産隊に診察に赴いた。羅小四らが生産隊に戻ったとき、俺の荷物がないことに気がつき、生産隊長に王二を見かけなかったかと聞いた。王二ってだれだ、そんな奴は聞いたことがない、と隊長は答えた。数日前に闘争大会を開いてやっつけたじゃないか、気の荒いばあさんが腰掛けで奴を殴り、すんでの所であの世に送っちまうところだったじゃないか、と羅小四が思い出させようとすると、隊長はますます俺が誰だか思い出せなくなった。当時、北京の知青慰問団が知青の生産隊での状況、特に、縛られて殴られたり、結婚を迫られていないか等の状況を調査しに来ようとしていた。だから隊長はますます俺のことを思い出したくなくなっていた。羅小四はさらに十五隊に行って陳清揚に俺を見かけたことがなかったか尋ね、その上俺と曖昧な関係にあったことをほのめかしさえした。陳清揚は、全く何も知らないわ、と答えるのみだった。

羅小四が行ってしまってから、陳清揚はわけがわからなくなった。どうも多くの者が王二の存在を否定しているようだった。困惑の原因はそこにあった。皆が存在するというものは存在するとは限らない。というのは目の前のこと全てが大嘘だったからだ。皆が存在しないと言うものはきっと存在する。例えば王二、もし彼が存在しないなら、その名前はどこから湧いてきたというのだ。陳清揚は好奇心を押し殺すことができず、ついに何もかもうっちゃって俺

sample

を捜しに山に入ることにしたのだ。

俺が気の荒いばあさんに腰掛けで殴られて気絶したとき、陳清揚は山から下り診察に駆けつけてきた。その時彼女はこらえきれずに泣き出し、その上皆の前で、俺がよくならなかったら俺の面倒を一生見ると宣言までした。結局俺は死なず、下半身不随にもならなかった。俺にとってはよいことだったが、あいつにとっては喜ばしいことではなかった。これではまるで身持ちが悪いと皆の前で暴露するようなものだった。俺が死んだとか、動けなくなったのだとしたら、それは当然の報いだったが、でも俺はたった一週間病院にいただけで飛び出してしまった。陳清揚にとって、あたふたと下山していったあの背中こそ俺であり、俺はその記憶の中の存在だった。よほどの理由がない限り、俺と寝たり、身持ちが悪いとされるようなことをするつもりはなかったのだ。それだからこそ、彼女が俺を訪ねてきたのは、まさにふしだらといえる行為なのだ。

山にあんたを訪ねていこうと決めたとき、白衣の下には何も着ていなかった、と陳清揚は言った。このようにして彼女は十五生産隊の裏の小さい山に来たのだ。ここは草がぼうぼうに生え、草の下には赤土がのぞいていた。午前中は、山頂から下方の平野に向けて、山頂の水のように冷たい風が吹き下ろし、午後には土ぼこりを含んだ乾いた熱風を吹き上げた。陳清揚が俺を訪ねてきたときは、白い風と共にふわりと降り立った。風は、まるで唇で愛撫するように服の内側に入り込み彼女の全身を巡る。本来彼女は俺など必要ではなかったし、訪ねてくる必要もなかった。

以前皆から身持ちが悪いと言われ、俺がその相手だとされたときは、毎日のようにやってきた。その時はその必要があるように思えたのだ。それが身持ちが悪いことを暴露し、俺がその相手だとわかると、誰も彼女のことを身持ちが悪いとは言わなくなった。羅小四を除いてだが、彼女の前で王二のことをあれこれ言うことなどなおさらなくなった。明らかにふしだらな行為に関しては誰もがこんなに恐れ、口にすることすらしなくなったのだ。

sample

下放した知青の視察に北京から誰かがやってくることは、皆知っていたが、俺だけは知らなかった。その前後の日々、俺は朝早くから夜遅くまで牛の放牧に出かけていたし、評判も悪かったので誰も教えてくれなかった。入院してから見舞いに来る者もいなかった。退院すると俺は山深くにはいってしまった。山にはいる前に会ったのは合わせて二人、一人が陳清揚だが、あいつは俺に何も言わなかった。もう一人が俺の生産隊の隊長だが、こいつも何も言わず、ただ温泉に療養に行けと行っただけだった。俺が、何も持っていない（つまり食べ物や炊飯用具のことだが）から出かけられないと言うと、貸してやってもいいと言った。借りても返せるかどうかわからないというと、大丈夫だと答えたので、奴から自家製の乾し肉や香腸（中国式ソーセージ、甘みがある）を借りた。

〈続く〉

sample

コレクション中国同時代小説 2　黄金時代
王小波　著／桜庭ゆみ子　訳
定価三、七八〇円（本体三、六〇〇円）
ISBN978-4-585-29512-9　C0397
四六判・上製・四四〇頁
二〇一二年四月刊行予定
勉誠出版 株式会社　刊